

ウドをその影武者だとなさっているが、私は山ウドを
山菜の筆頭に選びたい。

ご存知の通りタラは、とげとげの木のごずえ高くに、
ちよっぴりと芽がつく。そしてじょうずにとらぬと手
にとげとげがささり、文字通り痛い目にあう。またタ
ラの木はそうざらになく、山じゅう歩いてもとれる量
は知れている。味はウドによく似ているが、香気や風
味がちよっと落ちる。

それに比べるとウドはちがう。とくに山ウドは秀逸。
里ものやハウス園芸の軟白ものと同一視されてはかな
わない。短いがずぶとく、白くたくましい茎、中には
ほんのり赤紫に薄化粧までして、ちぢこまった緑の葉
がびっしりつき、全体がしっかりとし、山土のにおい
がブンとくるからたまらない」

偉大な郷土史の研究者として大きな足跡を残された羽
柴氏が、足まめに歩かれた郷土の自然の中で、厳しい発
掘や探求の傍こうした山菜にまで親しみを寄せ暖かい愛
情を注ぎ、細かい観察を怠たらなかったとは、唯々頭が
下がる思いである。

本当に佐伯にとってかけ替えのない人を失ってしまった

た。残念でならない。今はこうして皆で偲ばせていただ
き、ご冥福をお祈り申し上げるばかりである。

歌に寄せて先生を悼む

市野瀬 仁

(会員・佐伯市長島)

通夜の夜・十月二十日

師のみ顔しばし拜みて菊を供ゆこの世に神を見るが如
くに

讚美歌と花に包まれ師は眠る慕いし人の後は絶えざり

かくまでに人の心を動かして逝かれし人は珍らしきかな

笑たたえ主のみ元に昇天す俗人に徹して光る神の人

葬儀に臨んで 十月二十一日

教会にあふれし人は師を偲び秋雨に流る讚美歌やます

財産も地位も酬むかも求めずに人と世のため命燃せり

ふる里の歴史を編みし師の君は少し残して旅立ちにけり

ハイハイ羽柴ですこの声すでに今はなし電話帳の文字静かに見入る

秋深し佐伯の里に偉人消ゆ

銭に信仰の強さ世に贈る

竜護寺に気高く生きた稀有の人

「故羽柴副会長をしのぶ会」に参加して十一月十七日師を語る会に集いて聞きたれば指示うけしこと皆語りおり

人を愛し自然を愛し師は逝きぬ独歩の碑完成待たず

へだてなく太陽のごと暖かし人の心に影を宿せり

もう居ない聞きたきことの多かりしに

先生は短歌より俳句が好きであられた。そして、どんな人の愚作でも心で聞き、先ず新鮮な例を示して下さる。そんな方であったと思う。 合掌

活字印刷本に変わる前後

塩 月 佐 一

(会員・佐伯市匠南区)

私は史談会に入会してまだ七年と日は浅い。

昭和五十年三月学校を停年退職すると、引続いて佐伯教育事務所社会教育指導員として勤め、全く未経験の文化財行政の事務を取扱うことになった。そこで先任者の助言により、史談会の協力を仰ぐために、はじめて羽柴先生を訪れ、御援助をお願いした。先生は「一緒にやりましょうや」と暖かく迎え入れて下さった。

それ以来、史談会の催には、事情の許す限り出席して御指導を仰いだ。

私は美術品を見るようなきれいなガリ版刷りの『佐伯史談』を、待遠しい思いで毎号の発行を待った。新しい